Poe が描いた四人の完璧なる女性達

勝　部　章　人

この小論では，Edgar Allan Poe 短編小説の中にある四つの女性名をタイトルにしたものを取りあげる。作品の書かれた年代順に並べると，"Berenice"(1835), "Morella"(1835年), "Legeia"(1838年), Eleonora"(1842年) となる。これらの四つの小説には偶然女性名のタイトルがつけられたのであろうか。そうではなく Poe が意図的にタイトルをつけたとするならば，これらの作品は当然共通した要素を持っていると考えるべきである。そこで，これらの小説に共通した要素があるとすればどのようなものかを考察し，四つの女性名のタイトルを持つ作品群が Poe の他の作品の中でどのような位置をしめるかを検討するのがこの小論の目的である。

まずこれらの短編小説群が批評家によって今までどのように取り扱われてきたかを概観することから始め，これらの作品の位置づけを明らかにしていくことにする。

これらの作品に対する批評は二つの傾向に分けることができる。第一は，D. H. Lawrence と Marie Bonaparte に代表される，いわゆる精神分析的解釈である。Lawrene はこの四つの作品の中で，"Eleonala" は無視しているものの "Legia" を最もよくできた重要な作品であると考え，"love story" であると述べる。[(1)] Bonaparte はフロイトの影響を強く受けた精神分析的手法でこれらの作品を解釈している。[(2)] しかしこれらの批評はタイトルにもなっている女性の人物像そのものに焦点があてられすぎるきらいがあり，人物としての精神分析的解釈に終始し，ここで行おうとしている作品そのものを分析しようとする試みの手助けにはなり得ない。

第二は，語り手に焦点をあてた作品解釈である。しかし語り手に焦点はあてられているものの，ある時期までは，語り手の信頼性に対する実りのない議論をくり返してきた。[(3)] この無意味とも思われる論争に結着をつけたのは Lauber も指摘しているように Froyd Stovall である。彼は "Conscious Art of Poe" の中でごく短い文章で次のように言ってのける。

> Of course the entire action is the hallucination of ensanity, Presumably the narrator has recovered some degree of sanity when the story is written down[(4)]

この開きなおったかのような stovall の意見が語り手の信憑性を議論することの空しさを適確に表現している。

そこでこの小論では，今までと違った角度から，語り手に注目しなければならない。すなわち，これらの物語はすべて，各々の語り手の体験談という形式をとっているので，語られたことの信憑性ではなく，なぜ Poe がそのような異常とも思われる体験談を語らせるのかを考えることの方が必要なのは当然であろう。

まず，タイトルになっている四人の女性の作中での役割を考えることからこれらの四作品の解明を始めることにする。四人は各々語り手にとって理想的な美人として登場する。このことは物語を一読すれば一目瞭然であると共に，後に著しく述べるように，それぞれの名前の持つ象徴性からも容易に推測できるものである。そこで，この理想的な美人達が語り手にとってどのように映っているのかを考えるという点に問題は移ってくる。

この問題点を考えるにあたって，Poe と同時代に活躍し Poe と同じように理想美をテーマとした作家 Nathaniel Hawthorne の "The Birth Mark" という作品を取りあげ，ここで取り扱う理想美とはどういうものであるかを明確にしていきたい。

"The BirthMark" の主人公 Aylmer は Geogiana という若くて美しい女性と結婚する。しかし彼女のほおには，人間の手の形をしたごく少さなあざがあり，彼にとってはこのあざがあるばかりに彼女は完璧な存在ではなく，このあざさえなければ彼女は完璧な存在になると考える。そこで科学者である Aylmer は妻の反対を押し切って彼にとっては imperfection の象徴であるあざを取り除く手術を行うのである。しかし手術が成功したかに見え，Aylmer が "My peerless bride, it is successfull! You are perfect"[(5)] と叫び，Georgian が完璧な状態になったと思われた時間，彼女の命を消え失せていまうのである。

この物語のテーマは perfection であるが，Aylmer が完璧さを追求したために最愛の妻を失うという体験を通して，人生のより深淵な意味を悟るということに焦点を合わせて Hauthorne はこの物語を書いたと言える。

"The Birthmark" をここでわざわざ取りあげたのは，この小論で議論しようとする Poe の四つの作品にも "The Birthmark" で Geogiana という美人を通じて取り扱われた perfection のテーマが，各タイトルの女性を通じて，程度の差こそあれ，同じような形で表わされていることに気付くからである。そこで Poe はこれらの作品の中で perfection のテーマをどのように取り扱っているのかを深りながら，この四つの作品に共通する潜在した意味を考えることにする。

議論を進めるにあたり，便宜上，作品の書かれた年代順にではなく，似かよった作品同志であると思われる二作品に分けてまず "Berenice" と "Ligeia" を，次に "Morella" と "Eleonora" を論じていきた。

"Bernice" の語り手は他の三作品とは異なり，唯一名前が明らかにされた人物である。彼の名前の Egeus は Shakespeare の *Midsummer Nignt's Dream* に登場する愛を理解することのできなかった Hermia の父の名から Poe が命名したものと思われるが，物語の筋からも適切な命名であると言える。[6] しかし "Berenice" 以降の三作品で語り手に名前を与えなくなったのは，その必然性を感じなくなったからであろう。Poe はこの語り手の家系を "Our line has been called a race of visionaries"[7] と表現しているように，これらの物語の語り手は，現実ばなれした幻の世界を語るにふさわしい人物でありさえすればよいのである。だが，前述の語り手の信憑性論争にあったように，このような語り手の見たものを幻想にすぎないといってかたづけてしまうわけにはいかない。語られたものが事実であれ幻想であれ（我々も語られたものが幻想であると思わざるをえないが）なぜ Poe はこのような語り手にこのような夢のような話を物語らせるのかを考えなければならない。

"Berenice" において，理想美の具現化として "Berenice" という女性が登場する。語り手にとって彼女は "gorgeous yet fantastic beauty"(85) であり，"Unparalleled beauty"(87) な在存である。この女性を彼は生きた人間としてよりも理想化した対象として愛するのである。

> I had seen her—not as the living and breathing Berenice, but as the Berenice of a dream (87)

そして，この platonic な愛が彼の monomaniac な性格を通して彼女の美の集約されたものとしての歯に固執させることになる。

> In the multiplied objects of the external world I had no thoughts but for the teeth (89)

と彼が述べるように，彼の偏執的愛は彼女の歯にのみ集中し，やがてはそれらを独占するがために，衝動的に彼女の歯を抜き取り，自分の手に入れようとするのである。このことは，物語の最後の場面で，床にころがった "some instruments of dental surgery"(90) によって，Poe は読者に示唆を与えている。さらに Poe は "thirty-two small, white and ivory-looking substane" (90) と歯の本数を書くことで物語を締めくくっている。32本の歯は大人の歯としては一本の不足もない完璧な状態を表わすためにわざわざ書いた数字なのである。すなわち，語り手にとって，理想美の集約である彼女の歯は perfection の象徴であると見るべきである。語り手は perfetion の象徴を手に入れようとしたが，

その瞬間，実は地上的な存在である Berenice はこの世を去ってしまうのである。

Hawthorne の "The Birthmark" における最後のアレゴリカルな一節がこの物語には欠如しているが，語り手に焦点をあてれば，"The Birthmark" と同じように，この物語も完璧さを求めた代償として地上的存在である Berenice の死を体験せざるをえないという読み方が可能である。

次に "Ligeia" であるが，この物語は Poe 自身も，最も良く書けた物語であると言っているように[8]数多くの批評家によって良かれ悪しかれ批評の対象とされている作品である。しかし前述の Rauler も述べているように，Ligeia という女性に焦点をあてた批評が多すぎるために，語り手の在存がかすんだものになってしまっている。そこで，ここでは，多くの批評家が言うように "Ligeia" を Poe の masterpice の一つであるという概念を捨てて，あくまでも今までの議論の線上にある一作品として解釈していく方が有効である。

さて "Ligeia" においても，まず Ligeia という最高の知力と美しさを持っ女性が理想的な姿として語り手の前に現われる。その当時，彼女は博学であり，その容ぼうは faultless であり perfect であり，語り手の目には天上的存在であるかのように映った。彼は Ligeia を次のように表現する。

> And at such moments was her beauty—in my heated fancy thus it appeared perhaps—the beauty of being either above or apart from the earth—the beauty of the fabulous Houri of Turk (103)

彼は Ligeia の完璧な美を宗拝するかのように愛した。しかし不幸にも彼女は病に襲われ，それと共に彼の宗拝の対象である美貌は急速に衰え始め，ついには息を引きとってしまう。

語り手は，美を追求する対象を失い失意のうちにイギリスの荒地をさまようことになるが，語り手の愛が理想美の追求といった観念的なものであったにもかかわらず Ligeia 自身は自分を地上的な在存であることを十分認識していたように思われる。このことは，Poe が彼女を地上的な在存として愛せなかった語り手の言葉ではなく Ligeia の作った詩の形で表現されていることからも理解できる。Ligeia が死の直前に作った詩は次の句で終る。

> ... the play is the tragedy, "Man", And its hero the Conqueror Warm. (107)

Conqueror Warm とはついには人間の肉体をむしばむものなのである。人を観念的な対象としてしか愛せない語り手に対してその対象である Ligea の方が認識が深かったのである。そしてもちろん語り手はそのことに気づいてはいない。

この物語はさらに続く。理想美の追求の対象物としての女性を失った語り手はイギリスの古僧院で新生活を始める。その内部は世界各地のありとあらゆる装飾で飾りたてられたおよそ天上的な美とはかけ離れた，世俗的醜悪さを集約したような場所であった。

このような環境に "the fair-haired and blue-eyed Lady Rowena Travanion, of Tremaine"(108) を花嫁として向かえたのである。しかし Lady の称号を持ち明髪碧眼の Rowena もこの部屋と同じように世俗的には際ったものであっても，語り手の審美眼には醜悪さの際たるものとしてしか映らないのは当然である。彼は彼にとっては地上的醜悪さの象徴である彼女を激しく憎み，今は正に天上的存在になってしまった Ligeia に思いをはせる。

Ligeia を襲った同じ運命が Rowena にも襲いかかる。彼女の容態は急に悪化し，やがて死を迎えたかに思えた。そこで語り手は埋葬の準備を進めるのだが，死んだはずの彼女のほおが色づき生命がよみがえるのである。そして経帷子に包まれた体が起き上り，歩き出すのであった。しかしそれは fair-hair を持った Rowena ではなく，"blacker than the wings of the midnight"(114) と表現されているように，黒い髪を持ち，語り手が追求した美の象徴である大きな目を持った Ligeia の姿であった。

この Ligeia の reincarnation の場面は，前述のように，語り手の hallucination であろうと現実であろうと問題にはならない。問題は，なぜ Poe が，皮肉にも，語り手にとって完璧な美の象徴が，最も地上的な醜悪美の象徴の中によみがえらせたからである。Hawthorne の "The Birthmark", Poe の "Berenice" を議論してきた我々は，Ligeia の姿は理想化された美の対象としてではなく，地上的な存在としての自分自身を愛してほしかった Ligeia の亡霊であり，観念的な愛しか知らない語り手に対する自己の主張であることがわかる。しかし語り手はこの言葉なき警告に気づくことはない。Poe は，このような異常な体験にもかかわらず，何も悟ることなしに，以前と同じように，彼女の目を凝視するのみの語り手の姿を描いている。

以上 "Berenice" と "Ligera" に関して語り手に焦点をあて議論を進めた結果，この二つの物語に共通した要素が明白となった。現実には地上的存在である語り手が，同じく地上的存在である女性を理想化し，完全なる美の象徴として崇拝するかのように愛し続ける姿が描かれている。だが Poe は語り手が地上的存在であるがために，避けることのできない女性の死に直面するという体験のみを語らせるにとどめ，語り手が出来事を体験した当時と，後に物語を語る時点の心的変化に関して読者に情報を与えることはしない。この二作品では perfection を追求した男たちの体験談を披瀝することにとどめている。

次に "Morella" と "Eleonora" は前出の二作品とは決定的異質な作品である。これがこの小論でとりあげた四作品を年代順に並べず，二つづつに分けて考えた理由である。さて，この二作品がどのような共通した要素を持つかを明らかにするためにまず "Morella"

から考えてみることにする。

"Morell" の語り手にとって，理想化された美の具現化としての女性はもちろん Morella であるが，彼女に対する語り手の愛も観念的なものである。語り手はその愛を次のように語る。

> My soul...burned with fire it had never bofore know ; but the fires were not of Eros. . . . (91)

そして，同じように彼女も人間として当然の死を向かえるのであるが，この物語の語り手は，自分の理想化した美の追求においては "Berenice" "Ligeia" の語り手よりもはるかに積極的である。彼は Morella の死際に，肉体的にやつれ果てた彼女を the most beaufiful became the most hideous" (92) と表現し，観念的な美を渇望するばかりに彼女の肉体的な死をもいとわないばかりかそれを望むほどである。

ところが，幸か不幸か，Morella の予言通り，彼女は一子を残し，その子は母親の Morella に生き写しの女性に成長する。しかし実際には，この子の姿は語り手が見た，理想化された美の象徴である Morella の幻影にすぎなかったのである。

すなわち，Morella の死後，語り手は実際の体験ではなく，彼の幻想を語ったことになる。その証拠に，その子を現実的な存在として洗礼を受けさせ，名前を授ける瞬間，語り手が Morella という名前を口に出したとたんその子は "I am here" と言いながら，その目を地上から天上へ向け死んでゆくのである。その場面を Poe は次のように描写している。

> She turned her glassy eyes from the earth to heaven, and, falling prostrate on the black slabs of our ancestral vault, responded—"I am here!" (95)

幻想としての Morella を実体化しようとする時，自からその幻想を消滅させるのである。

この物語の最後のパラグラフは "Berenice" "Ligeia" とは趣を異にするものである。語り手は，この物語で語った体験をした当時と，後にその体験を物語っている時とでは，明らかな心的変化をきたしている。語り手は，自分自身の Morella に対する愛が観念的な愛にすぎなかったことを悟るのである。そして Morella と生き写しの子供の墓の中に，Morrella の幻影を見た自分に対して苦々しい笑い (bitter laugh) を浮かべるのである。この笑いこそは，現実の女性を理想美の象徴として崇拝するようにしか愛せなかった，以前の自分に対する自嘲の苦々しい笑いに他ならない。

この物語も perfection をテーマにはしているが，それを追求し，果たせなかった男の

心的変化により重点を置いて書かれた物語であるという点において以前に議論した二つの作品とは異っている。次に考察する "Eleonara" は，もう一歩進んで perfection よりもこの心的変化そのものをテーマにした作品なのである。

"Eleonara" の語り手は，若かりし日の思い出として Eleonara との恋愛を語る。

> She whom I loved in youth, and of whom I now pen calmly and distinctly these remembrances, was the sole daughter. . . . (218)

この引用は，今筆を取っている語り手が，かつて Eleonara を愛したころの彼とは変化していることを明確に表わしている。では彼はどのように変わったのであろうか。

語り手は自分の人生を二つの時期に分けているが，その最初の時期に愛した Eleonara は，エデンの園を思わせるような楽園に住む美しく汚れのない乙女として次のように描写されている。

> . . . . she was a maiden artless and innocent as the brief life she had led among the flowers. (220)

語り手はこの時期，彼女を理想化して崇拝するように愛するが，やがて彼女にも死が訪ずれるのは前出の三作品と同じ図式である。

しかし，この語り手は，彼女の死に際して自分が，理想化した Eleonara を愛していたにすぎなかったことを知る。彼女の完璧な美は死によってのみ成就されるべきものであることに気付くのである。語り手は次のように述べる。

> She had been made perfect in loveliness only to die. (220)

彼は，実体のない観念的な愛しか知らなかった自分を悟り，楽園を去って "the vanities and the turbulent triumphs of the world" (222) へと脱出する。ここで彼の人生の第一期は終る。

語り手が "the second great era of my being" (218) と名づける人生の第二期において，彼の愛の対象となる女性は Eermengarde である。しかし語り手は，この女性に対しては観念的な愛ではなく，彼の言葉を借りれば abject な愛をささげるまでに変貌している。そして彼女への愛が，若き日の Eleonara に対するものとは異るものであることを次のように告白する。

> What indeed was my passion for the young girl of the valley in comparison with the fervor, and the delirium, and the spirit-lifting ecstacy of adoration with which I poured out my whole soul in tears at the feel of the ethereal Eermengarde? (222)

彼は始めて，涙を流すような愛を体験し彼女との結婚生活に入るのである。

Poe はこの物語の最後で暗示的な文章を読者に示している。それは，あたかも語り手の夢の中に現われた精霊のようなものの語り口として次のように語られる。

> "Sleep in peace!—for the Spirit of Love reigneth and ruleth, and, in taking to thy passionate heart her who is Eermengarde, thou art absolved, for reasons which shall be made known to thee in Heaven, of thy vows unto Eleonara." (222)

この文章は，理由は明らかにされていないが，語り手が Eleonara との誓いを破って Eermengarde を愛したことの妥当性が暗示されているものと考えられる。Poe は，これを Eleonara への裏切り行為ではなく，観念的な愛から実質的な愛を知るに至った語り手の成長として当然なものと肯定しているのである。

言いかえるならば，"Eleonara" は観念的に人を愛することしか知らなかった少年の現実的な愛を知る大人への成長を描いたものであり，その心的変化そのものをテーマにした物語であると言える。"Morella" の語り手の苦々しい笑いに暗示された語り手の心的変化がこの物語ではより明確な形で我々に語りかけてくるのである。

さて，以上のように，女性名をタイトルに持つ四つの作品を語り手に焦点をあてて，各々の作品の持つ意味を探究してきた。そこでもう一度，この四つの作品を一つ一つとしてではなく， Poe が意識的に女性名のタイトルをつけた一連の作品群としてとらえ， Poe がなぜ，このような女性の名前をタイトルにした作品群を書くに至ったのかを考えてみることにする。今まで，より共通性があるという便宜上の理由で四作品を創作年代順にではなく討論してきたが，ここでは Poe の作家としての創作遍歴を考えるために，"Berenice", "Morella", "Ligeia", "Eleonora" という年代順に置きかえてみることにする。

タイトルになった四人の女性が，各々の語り手にとって，理想化された美または perfection の象徴であることが，四作品にいづれも共通していることは議論したとおりであるが，その傍証となるものに各々の女性の名前そのものの持つ象徴性がある。Thomas Ollive Mabbott は未完に終った彼のライフワークである *Collected Works of Edgar*

Allan Poe の各作品に付けた Notes で，これらのタイトルの name symbolism の重要性を説いている。彼の研究によると Berenice はエジプト神話で，夫が戦争から無事帰るのを祈願して神殿の上に彼女の髪の毛をおくと Coma Berenice (Berenice's hair) という星座になったという話の主人公の名前である。[9] Morella は1595年から1653年まで実在した人物名からの借用であるらしいが，14の言語を知っていたなど卓越した知力の持主であると共に black magic に興味を示したという非日常性を持つ女性であった。[10] Ligeia は Milton の "Comus" にでてくるギリシャ神話のSiren の名前の一つである。[11] また Eleonara は Dryden の哀歌 *Eleonora* の若くして死を向かえる乙女，もしくは Jean-Pierre-Jacques-Augute de Labouisse-Rochefort が作品の中で美と徳を賞賛した妻 Éléonora からの借用であろうと言う。[12] このように，四人の名前は，美または perfection の象徴としての女性にふさわしく Poe が命名していることが理解できる。

これらの女性を美または perfection の象徴として自らの手に入れようと無益にも努力する男の姿が語り手自身によって描かれているのがこの四作品なのである。

しかし最初にも述べたように，これらの美女達に目をくらまされることなく，語り手に焦点を合わせることでこれらの作品群は自ら違った意味あいを帯びてくる。"Berenice" では，現実の女性に空しくも理想美を求め続ける男が描かれるが，この物語はその空しさのみを描写するのに終始している。"Morella" では，理想美を求め続けた男が最後に苦笑することにより，過去の自分を振り返る。成長した語り手として我々に問いかける。"Ligeia" では，理想美を追求した男がいかにしてその空しさを知り，生長していくかの過程が描写される。そして最後に書かれた "Eleonara" は明らかに innitiation を主題にし，現実の女性を理想化することがいかに空しく子供じみたことかを示し，死すべき肉体を持つ人間を愛することが成長した人間の愛であることを語りかけるのである。

Poe の作品はよく，観念的すぎて現実味がないと言われる。なるほどこれらの四作品も自然主義的な愛の物語としてはあまりにも観念的な愛の描写にしかすぎないかもしれないが，実生活を描くことにあまり興味を示さず，彼独自の世界を描いたものが多い Poe の作品としては，やはり，Lawrence のいう意味とは違った意味での愛の物語なのである。これらの作品は，現実の世界からかけ離れた世界に真理を求め，やたらと文学理論を振りかざす，またそうせざるを得なかった Poe の姿ではなく，その背後に隠された一個人として理想と現実に悩む Poe の姿を垣間見せてくれるのである。

"Eleonora" の書かれた一年前に，innitiation という同じテーマが扱われた "Decent into the Malström" が書かれたのも偶然ではない。この時期，Poe は，作品において真理の追求に没頭している，いわば公的な在存としてではない，一個人としての自分の姿を一度さらけ出そうとした時期であったのかも知れない。

NOTES

(1) D.H. Lawrence, "Edgar Allan Poe" *Studies in Classic American Literature*, 1923 rpt. Eric W. Carlson ed., *The Recognition of Edgar Allan Poe : Selected Criticism Since 1829* (n.p. : Unversity of Michigan Press, 1966), p. 111.

(2) 四人の女性を "Tales of Mother" と名ずけた章の The Live-in-Death Mather としてそれぞれ議論している。See Marie Bonaparte, tr. John Rodker. *The Life and Works of Edgar Allan Poe : A Psycho-Analytic Interpretation* (New York : Humanities Press, 1971), pp. 213-273.

(3) John Lauber は Ligeia 論争が語り手の信頼性にあったことを述べている。
John Lauberr, "Ligeia' and Its Critics : A Plea for Literalism" in *Stvdies in Short Fiction IV* (1966) rpt. *Twentieth Centvry Interpretations of Poe's Tales : A Collection of Critical Essays* (Englewood Cliffs, N.J. : Prentice-Hall, 1971), p. 73.

(4) Floyd Stovall, "The Conscious Art of Edgar Allan Poe", *College English*, XXIV (March. 1962) rpt. *Poe : A Collection of Critical Essays* (Englewood Cliffs, N.J. : Prentice-Hall, 1967), p. 176.

(5) Nathaniel Hawthorne, "The Birthmark" *Nathaniel Hawthorne : Selected Tales and Sketches* 3 rd. Ed. (New York ; Holt, Rinehart and Winston, 1950), p. 281.

(6) Thomas O. Mabbott は "Egeus ia the name of Hermia's father in *Midsummer Night's Dream*, who failed to understand love". と述べている。Thomas Ollive Mabbott (ed.) *Collected Works of Edgar Allan Poe : Tales and Sketches 1831-1842* (Cambridge : The Belknap Dress, 1978) p. 208.

(7) Edgar Allan Poe, "Berenice". *Selected Poetry and Prose of Edgar Allan Poe*, ed. T.O. Mabbott (New York : The Modern Library, 1951) p. 84. この小論で取り扱った4つの作品の引用はすべてこのテキストからのものである。以後，ページ数のみで示すことにする。

(8) Edgar Allan Poe, *The Letters of Edgar Allan Poe* Vol. II ed. John Ward Ostrom (New York ; Gordian Press, 1966) p. 329.

(9) Thomas Ollive Mabbott, *Collected Works of Edgar Allan Poe* II, p. 208.

(10) Mabbott, p. 222.

(11) Mabbott, p. 330.

(12) Mabbott, p. 645.